

岡崎城籠田総門跡発掘調査 現地説明会 (R1.8.31)

[発掘調査] 令和元年8月19日～令和元年9月6日(予定) 調査面積約27.0㎡

[調査経緯] 岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画 平成28年度改訂版」(H29.3)に基づき、岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回岡崎城籠田総門跡の発掘調査を実施している。

[総構え・総堀・総門]

- ・**総構え**：城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や石垣、土塁で囲い込んだ城郭構造のこと。惣構え、惣曲輪とも呼ばれる。
- ・**総堀**：総構えを構成する堀のことを「総堀」という。惣堀とも。総堀は城郭の最外郭にあたり、軍事上の防衛施設。
- ・**総門**：総門は総構えの東西の出入口のこと。岡崎城の場合、東は「籠田総門」西は「松葉総門」と呼ばれる。

[籠田総門]

- ・総門は田中吉政(在城：1590～1600年)の総構え建設時に構築されたと考えられるが、このときの出入口の正確な位置や構造は明らかではない。慶長14年(1609)に伝馬町が成立すると、総堀を渡る東の地点は「伝馬口」と呼ばれ、以降近世を通じて東海道はほぼ固定化される。
- ・籠田総門は万治元年(1658)に焼失し改修された。その際、すぐ南側の総持尼寺の稲荷山を削り取り、総門を広げ二つの枡形を組み合わせた構造へと改修された。

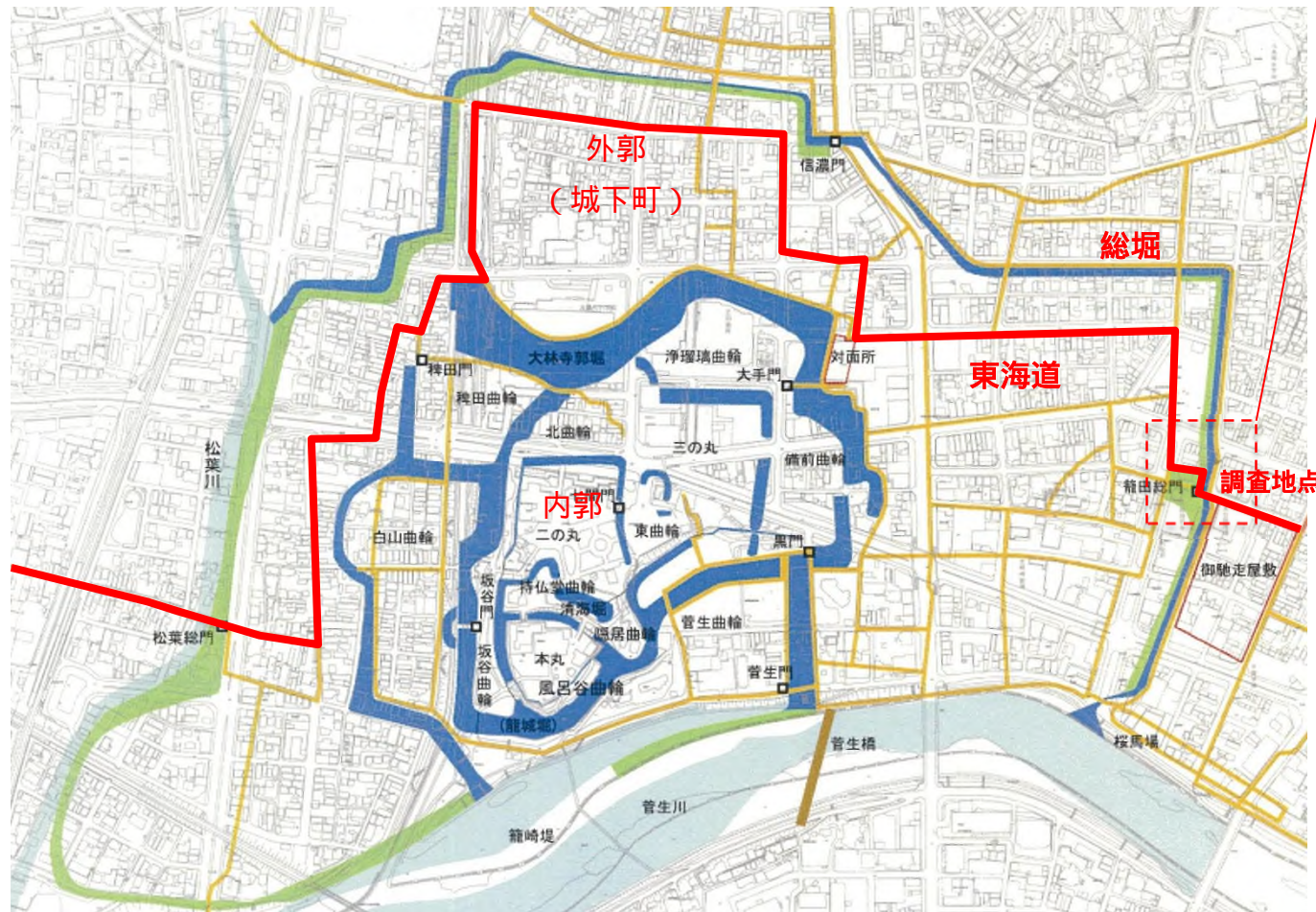
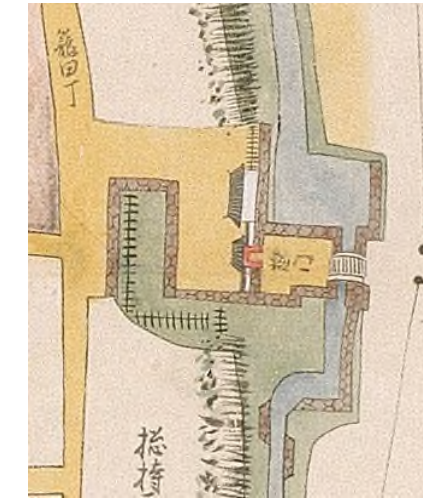


図1 岡崎城郭図と調査地点

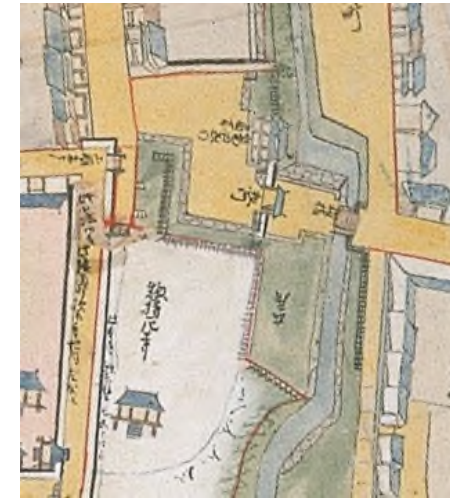
[絵図における調査地周辺の変遷]



絵図【17世紀前半】



絵図【18世紀代】



絵図【1800年頃】



地籍図【1884年】



地図【1927～30年】

- 絵図**：「籠田総門」周囲は土塁(緑色部分)で囲まれ、単一の枡形であることがわかる。街道入口から右折れした地点に一つの門を配置している(街道正面からは門が見えない)。
- 絵図**：万治元年(1658)の改修後の状況が表現されている。改修により二つの枡形を組み合わせた構造へと変化している。門は二つの枡形を分ける地点に配置され、街道正面に門が見えるようになった。また、枡形や周辺の総堀が石垣化していることがわかる。
- 絵図**：基本的には絵図 からの変化はなく、この状態で幕末まで至るものと考えられる。
- 地籍図**：この段階には総堀の痕跡が認められる(水色部分)。しかし旧東海道の枡形内での折れは消滅し、総門を形成した土塁や枡形部がすでに宅地化されたことがわかる。
- 地図**：籠田総門より南側では総堀の名残りが確認できるが、総門より北側ではすでに埋没したことがわかる。

【籠田総門の規模】

明和7年(1770)の「書上文書」(城主交代の際の引継ぎ書)に城内の建物等の規模の記載がある。

籠田総門	横内法2間1尺3寸(約4.0m) 男柱より控柱迄1間3尺(約2.7m)、くぐりなし
番所	桁行5間(約9.1m)、梁行2間1尺(約3.9m) 矢狭間1、鉄砲狭間4
門南堀	1間4尺5寸(約3.2m)矢狭間なし、鉄砲狭間2
門北堀	1間4尺(約3.0m)矢狭間なし、鉄砲狭間2
総門橋	長3間(5.5m)幅3間(約5.5m)

【調査区の配置】

発掘調査の調査区は1箇所、籠田総門の痕跡(礎石)を確認する他、枡形内部や総門手前の総堀についても確認することを目的として調査を実施している。調査区の規模は幅1.5m、延長18.0mである。調査区西側では総門の痕跡が、調査区東側では総堀の痕跡が確認されることを想定して調査区の設定を行った。

【調査成果】

- 調査区内は中央部付近で確認された現代の集水枡を境に西と東で様相が異なる。
- 調査区西側では地表面から約0.65~0.7mで地山が確認されたが、総門の礎石等は認められなかった。北壁沿いは下水管の掘り方による攪乱があることから調査区の北側の地山の残存は期待できない。
- 調査区東側では地山が落ち込む状況が確認された。



写真1 調査区西側(西から撮影)



写真2 調査区東側(西から撮影)

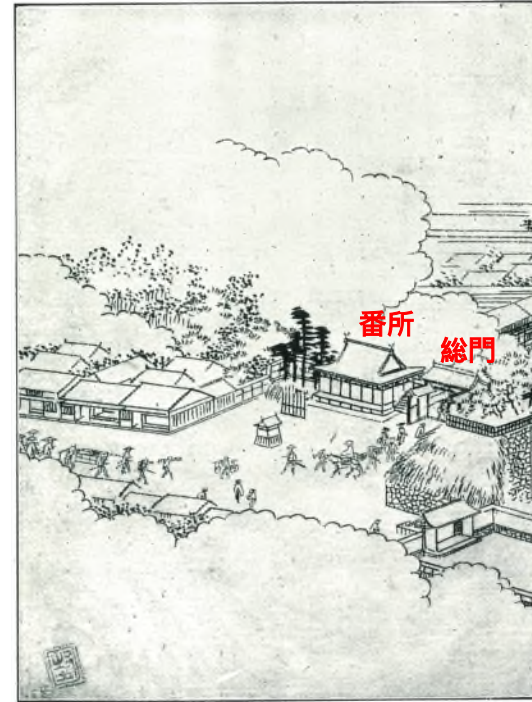


図2 江戸後期に描かれた総門
(内側からみた状況)

- 総堀内部には長方形の石材(長さ2.5m)が5石敷き並べられている状況を検出した(仮に「石敷き」と呼称)。石材間はモルタルで目地が埋められている。石敷きを支える下部の石積みも確認した。陶製の土管が石敷きの下に潜り込んでいることから、土管を保護するように石敷きが架構されていると思われる。石敷き及び土管の設置時期は近代以降と考えられる。



写真3 総堀掘り方(南から撮影)



写真4 石敷き下層部(西から撮影)

【まとめ】

籠田総門周辺部の土地の改変について

総門南の総持尼寺の敷地は大正15年(1926)に岡崎郵便局(現康生郵便局)及び電話局(現NTT西日本岡崎支店)の敷地となった。また大正12年度から昭和9年度の間には下水道事業により下水管が敷設されているため、この頃に総門付近が大きな改変を受けたことが想像される。

また、今回の調査における遺構検出面は現況道路の路床改良直下の地山であるため、道路建設時に地山の上層部が削平されている可能性が高い。こうした近代以降の土地の改変により、総門の礎石等はすでに滅失した可能性がある。また調査区外の周辺部における総門の残存も考慮すべきであるが、土地の改変は広範に及ぶものと考えられる。絵図や地籍図等から総門の位置を想定する作業が重要となる。

総堀について

総堀は近世の絵図や総堀の痕跡を残す近代の地図との重ね合わせにより想定された位置で確認することができた。堀は地山を開削して構築している。絵図では石垣が描かれるが、現状では素掘りを呈している。この堀法面から石敷き部までの間は拳大の円礫が充填されており、石垣背後の裏込め石のようにも思われる。このことから、本来は絵図のとおり石垣を構築していた可能性がある。近代の石敷きの下層部の石積みが総堀の石垣の一部を利用して構築された可能性も考えられるが想定の域を出ない。

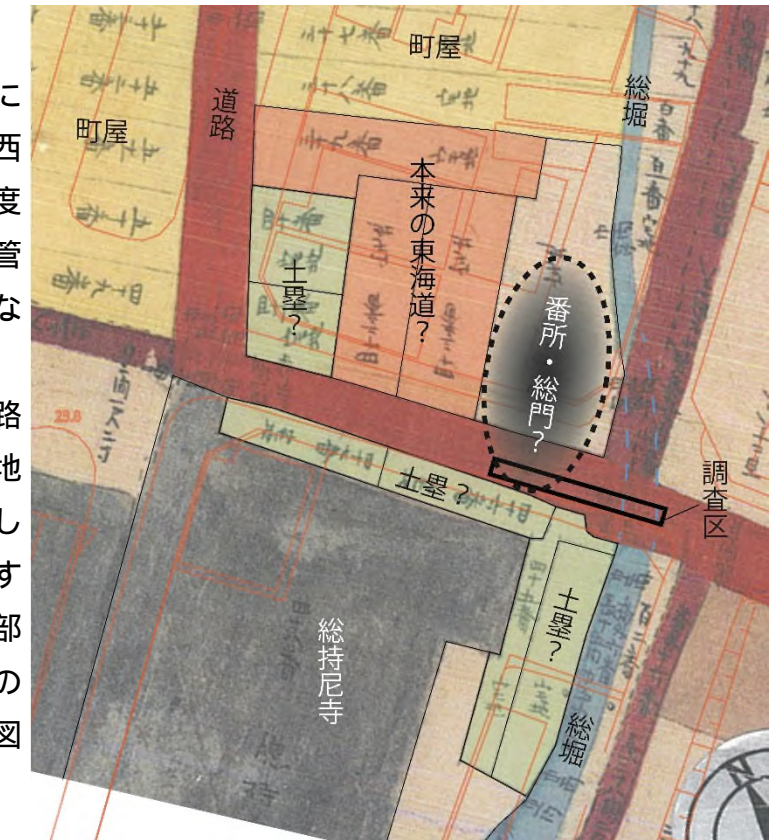


図3 籠田総門想定位置図
(現在の地図(赤線)と明治17年の地籍図の重ね図)
絵図・と比較しながらご覧ください。